

令和五年度 道伝えの日 芭蕉忌句会 入賞句

○兼題句 「芭蕉忌」

〔俳人協会岐阜県支部 大野鵠士選〕

一八、芭蕉忌の独りの煮炊き怠らず

芭蕉の生き方を偲ばせるような、懈怠なきあり方が示された潔い句だ。

佐藤 満知子

二二、芭蕉忌の釜鳴りを聞く平点前

特別な客人は座に存在せず、ひたすら聴覚を研ぎ澄まして閑寂の極みを出現させた。

澤木 正子

・互選

〔一席〕

一五、傘立ての寄り添ふ杖や芭蕉の忌

奥田 貴美子

〔二席〕

一八、芭蕉忌の独りの煮炊き怠らず

佐藤 満知子

〔三席〕

二六、箒目に鳥影過る翁の忌

役田 八重子

○当季雑詠句（秋・冬）

〔俳人協会岐阜県支部 大野鵠士選〕

九、この町に喪の灯もあらむ良夜かな

下垣内 町子

天界の曇りなき名月に対比させた地上の町の灯の中に喪の灯を点じ、想像力の翼を豊かに羽ばたかせた。

一一、星飛んでまたひとつ消す金蘭簿

長瀬 理々子

星の命が消えるのと相呼応するように「金蘭簿」から名を消す行為は、あでやかながら悲哀の氣に満ちて胸を沾らす。

・互選

〔一席〕

九、この町に喪の灯もあらむ良夜かな

下垣内 町子

三六、箒目も庭の景とし萩の寺

楢本 洋子

〔三席〕

二二、強面の漁師のピアス寒昂

澤木 正子

二五、納骨の母膝に抱く小春かな

今寺 久枝



令和五年度 道伝えの日 芭蕉忌句会 高校生の部 入賞句

○当季雑詠句(秋・冬)

・飛驒俳句会代表 伊藤浩子選

### 〔吉城高等学校〕

入賞

場外にボール飛ばして秋麗

二年

岩塚 いわづか

紗都 さとと

野球だろうか？澄み切った青空へぐんぐん伸びる場外ホームラン。  
季語の秋麗が作者の心にピタリである。

### 〔飛驒神岡高等学校〕

入賞

霜柱リコーダーから出る邪悪

三年

中島 なかしま

咲音 さきね

リコーダーは音が不安定で、息の強さや方向で思わぬ音が出てしまう。  
作者はその音にやや憎しみを感じ邪悪と表現した。霜柱のようにキラキラした透明な音を出したい作者である。

入賞

秋の蝶夢の決まらぬ我置いて

二年

井上 いのうえ

歩香 ふみか

高校二年生の作者は進路に迷っている。あれこれ考えている窓の外には秋蝶が自由自在に飛び交っている。羨ましく思いながらも、大切な自分の将来をじっくり考える作者である。

入賞

木犀の香りの先に戦火の世

二年

中島 なかしま

聖音 さとね

秋晴の木犀の香が漂う日向にいる作者に続く空の下で、人々が殺し合っている現実がある。割り切れない苛立たしさが句になった。

